

川上光彦さん(67)＝金沢市

金沢の町家について語る、NPO法人
理事長の川上光彦さん＝金沢市東山で



全国に誇れる金沢の魅力の一つが、藩政期―戦前の風情を今に伝える町家。学識者や建築設計士らを主なメンバーに、調査や修復に向けた研修、情報発信と多くの事業を手掛けてきた。六月で発足から十周年を迎える。

「町家の利活用にとつ

て、首都圏から来る人が増えるのはいいこと」と新幹線に期待を込める。市内で毎年、百棟以上が壊されている。「町家も私有財産だが、技術の継承とか、町並みをつくっている面では社会的な存在。なくなるのは残念だ」。近年はカフェ、ゲストハウスといった新し

藩政期の風情伝えたい



い使われ方が増えており、新幹線開業による交流人口の増加で、そうした動きがさらに活発になるよう願う。

市の委託で、町家所有者と購入・賃貸希望者をマッチングするコーディネート事業に三年前から取り組む。購入・賃貸希望の登録者百五十人のうち、一割は首都圏在住。その人たちが実際に物件を見に来る機会も増えるはずだ。

一方で、不安もある。先に「町家ブーム」が到来した京都では、料理店などに改修する際、鉄骨を入れる例もあったという。現代の生活に合わせて住みやすくする工夫は大事だが、「過度な改修は避けたい。歴史的な良さを生かすべきだ」。

新幹線によるにぎわいが、「活用」の名の下に、町家の核となるもので失わせないか懸念している。

「東京は人間も大学もマスコミも出版も集中している」。その波にのみ込まれず、落ち着いて活動しようと考えている。「地域には地域に合ったリズムがあるんです」。柔らかな表情で、町家の未来を見据える。

(目下部弘太)